



「教師は得意技で勝負せよ」

標題の言葉は、森隆夫お茶の水女子大学名誉教授（教育行政学）の教えである。40代の中頃に先生の著書で学んだ記憶がある。先生は私より8歳年上であったから、私がこの言葉を先生の著書で学んだ当時は、森先生は現職のばりばりであったということになる。

令和6年1月に「得意技で勝負する」の標題で一文を書いたが、今日は森先生の教えの言葉を拝借して標題とし、書き足りなかった事柄を書きたい。

47歳の時、笠田高校から農業経営高校へ転勤した。学校には1年生全員、2・3年生は希望者が入る拓心寮があった。男性の教師は舎監としての当直勤務がある。4月20日過ぎに初めての当直勤務が回って来た。20時消灯、その前に全ての部屋を巡回する。B棟1階西端の部屋へ入った時である。確かにアルコールの臭いがする。天井からである。私は上級生らしき生徒に命令した。

「この上の酒をここへ下ろせ」

少しだけ顔色が変わったが、白^{しら}を切っている。少し間を置いて、

「ワシに下ろさしたら、全員1週間の停学処分にする。お前が下ろしたら、今回だけは許してやる。どっちにするぞ」

その生徒は、酒の未だ入っている一升瓶を下ろして、神妙な顔をして私に渡した。

初めて、舎監室で床に入った。森先生の言葉が浮かんで来た。酒が全く飲めない、臭いで酔うのは私の特技か、と生まれて初めて納得したのだった。

大学で空手部に入って、皆と一緒に初めて、池袋の清龍へ飲みに行った。1年生全員が順番に飲まされた。私は生まれて初めてアルコールを我慢して飲み込んだ。次に横の1年生が飲むのと同時に、私はといえば、胃袋の中の物体が全部、突然嘔き出して来た。



前は汚物でメチャメチャになった。自分はアルコールを受け付けないことを初めて知った。毎週金曜日は、夜の稽古の後、揃って清龍へ行ったが、最初に4年生で主将の岩山さんが、「小野には飲まずなよ」と皆に注意してくれた。

平成4年4月、農業経営高校から転出して、飯山高校2年、多度津水産高校2年間を経て、平成8年4月、再び農業経営高校へ今度は校長として赴任した。4年の間に学校は悪い方へ様変わりしていた。

始業式は何とか我慢出来たが、最初の全校朝礼（毎週月曜日1校時前）は我慢も限界だった。予定は8時30分開始であるのに、その時刻になっても大方の先生方は未だ職員室でいる。「時間が来ている。早く体育館へ行きなさい」と催促した。10分遅れてやっと始まった。私は壇上へ上がった。正副担任の先生方が、各学級の列の横に入って並んでいる。異様である。

「全校朝礼15分間、これは全校生に対する校長の唯一の授業である。生徒の間にいる先生方は、所定の席へ戻って並んで下さい」と命令した。

私は森隆夫先生の「校長は挨拶で勝負せよ」の教えを思い浮かべていた。そして、「農業経営高校を、生徒・職員全員が自分たちの学校として社会に誇れる学校にしようではないか。ここで皆さんにとっ

て大事な学校はこの農業経営高校なんだよ」こんな話を10分ばかりした。横を向いたり、ひどいのは後を向いて話をする生徒もいる。想像以上に態度が悪い。私は講話をしながら、特に態度の悪い生徒5人に目を付けた。話を終える前に、その五人を私の前（ステージ下）へ出て来させてから、^{おもむろ}徐に「終わります」と終わりの礼をした。

直ぐにステージから飛び下りて、学級と担任の名前と本人の名前を聞いた。そして、全校生が体育館から退場した後、5人を並べて姿勢を正させて宣言した。

「この後、お前ら5人に校長室で朝礼のやり直しをする。ワシに付いて来い」歩きながら、朝礼のやり直しの内容を考えた。

校長室で、床の上に5人と対面して正座した。5人に1人ずつ、朝礼の私の話の内容を聞いた。誰も答えられない。5分間位に短くして要約して話した。5人は板の間へ正座したことはないだろう。5分位で早くも痛そうにしているのだ。そんな生徒を尻目に、私は一息で一氣に立ち上がった。私の得意技、正座からの瞬間立ちである。生徒は時間をかけてやっと立ち上がった。私は言った。



「5人いたら、誰か1人くらい、「きょうはすみませんでした。次回からはきちんとします」その位、高校生なら言ったらどうじゃ。もう足が痛いのは治ったじゃろが。ワシが手本見せるきに、同じように立って見せてくれ」

当然だが誰も出来ない。だから私の得意技ということになる。

「一生で一番元気な時に、これ位のことが出来んでどうするんじゃ。もう1時間目の授業が始まってる。今日はこれで許してやる。次は45分正座して話をするぞ。皆に、そう言うといてくれ」

2回目の朝礼からは、まあ我慢出来る程度になった。話の内容は、森隆夫先生の教えを守り、智慧（知恵、これは阿呆が書く字ぞ、と私の高校の時の担任の牧先生は私に言った）を絞っていつも考えていた。

1年間が終わった或る日、1人の女子生徒が校長室へ入って来て、

「校長先生は朝礼で勉強の話は一度もしなかったですね。中学校では勉強の話ばかりだったのに…」と話してくれた。「ワシは勉強より大事な話をしよんじゃよ。それがようけあって、未だ勉強まで行かんのじゃ…」と、楽しく話したのを思い出す。

農業経営高校へ校長として赴任した最初の年、平成8年度に私は延べ168人の生徒を懲戒処分した。全校生330人前後、前年度の懲戒人数は僅か延べ36人だった。4.7倍である。それが、3年目には10数名になった。最後の4年目には、私の理想とする学校になっていたと今もそのように思っている。つい1週間前、当時一緒に苦労して頑張ってくれた60代後半の2人の農業科の先生にお会いした。「あのみかんを放り投げた生徒の懲戒処分から、学校が一気に良くなり始めたように思います」と私に話された。私にとっても、未だに時々思い出してしまう懲戒処分であった。

生徒指導主事に職員会議に諮る原案を聞いたら、「指導部注意」（前年度を踏襲）という。これは懲戒処分ではない。私は不満であった。職員会議では色々な意見が出たが、「校長訓告」に決まって、校長決裁となった。私は停学3日を告げた。

翌日八時前に学校へ行ったら、応接室から男の大きな怒鳴り声が聞こえる。事務長に見に行ってもらったら、「父親らしい」と言う。みかんを投げた生徒の父親だと分かった。生徒指導主事、学年主任、学級担任は困っているだろうと思い、事務長に「校長が話を聞くから」と言って校長室へ連れて来てくれ、とお願いした。両親と生徒が校長室へ入って来た。3人に



着席を促し、私は向かい合って座った。私が着席するなり、父親は目を三角にして私を睨み付けて、「校長！みかんを投げたぐらいで、何故停学や、納得出来ん。……」と怒鳴り出した。いずれ疲れてくるだろう。言うだけ言わせておけ、と決めて私は出来るだけ穏やかな顔をして、父親の顔を見ながら、この父親をどのようにして納得させようかと考えていた。私の腹が決まった頃、父親は疲れたのか、私が何も言わないからか、怒鳴るのを止めた。私は初めて口を開いた。

「お父さんの考えはよく分かりました。私はこの学校の経営責任者です。この学校は農業高校です。農業高校で最も大事な物は生徒の農場実習で生産された生産物です。ミカンやカキ、ブドウの果物や野菜、草花、ウシ、ブタ、ニワトリに加え、農産加工品です。ミカンは息子さんのものではありません。学校の大事なものを投げ捨てたんです。お父さんの考えはよく分かりました。私には全く理解出来ません」立ち上がって事務長に退学願の用紙を持って来てもらい、父親の前へ差し出して徐に、「これを書いて、息子さんを連れて帰って下さい」と話した。さあ、これからが父親との勝負だ。どう出て来るか。何分待とうか。私は気合を入れた。私は黙って15分生徒の発言を待つことにした。父親が退学願を書かないことは初めから分かっている。生徒が何も言わなければ、私の方から「君の考えを聞きたい」と発言することに決めていた。10分を過ぎた頃、生徒が泣きじゃくりながら、父親に言った。



「ボクは停学を受けると言ったのに、……。お父さんは間違っている。ボクは卒業したい。やめたくない。…」と言ってなお泣き続けた。母親も泣いている。父親は何も言わない。どうしていいか、何を言ったらいいか分からなかったのだろう。私は父親の言葉を待ったが何も言わない。これ以上待っても…と判断して、やおら口を開いた。

「私もお父さんは間違っていると思う。この学校の校長として、お父さんは許せないが、ここは息子さんに免じて、無期停学ならどうですか」あれほどに怒鳴り散らした父親が、小さい声で、「無期停学をお願いします」と言ってくれた。

この停学があってから、私も学校が良い方向に大きく変わり始めたと思っている。お父さんが怒鳴り散らしてくれたお陰である。この父親と私のやり取り、これも校長の挨拶であったと言えるのではないか。丁度30年前のことである。学校が良い方向へ向かう強い『きっかけ』を与えてくれたあの父親に、今では感謝しなければいけないのかなあと、今となっては懐かしい思い出である。

(令和8年3月1日)